



マゾヒズムの機能分析とその可能性－女性の性的主体性の（再）構築に向けて－

日合, あかね

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2008-09-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲4444

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1004444>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



氏 名 日合 あかね
博士の専攻分野の名称 博士（学術）
学 位 記 番 号 博い第 769 号
学位授与の要件 学位規則第 5 条第 1 項該当
学位授与の日付 平成 20 年 9 月 25 日

【 学位論文題目 】

マゾヒズムの機能分析とその可能性－女性の性的主体性の（再）構築に向けて－

審 査 委 員

主 査 教 授 宗像 惠
教 授 三上 剛史
准教授 金野 美奈子
教 授 坂本 千代
教 授 朴木 佳緒留

論文内容の要旨

氏名 日合 あかね

専攻 人間文化科学専攻

指導教員氏名 宗像 恵

論文題目

マゾヒズムの機能分析とその可能性

——女性の性的主体性の（再）構築に向けて——

論文要旨

本論文の目的は、女性の性的自立の可能性を模索することにあるが、そのために、女性の自立とは相容れないと考えられてきたマゾヒズムの概念を主題とする。なぜなら、マゾヒズムが受動性や従属性、あるいはそれと同等の意味を与えられてきたと考えられるからであり、性的主体としての女性の可能性を考察する際、マゾヒズムの問題を回避することはできないと考えるからである。

本論文では、従来のマゾヒズム概念の再検討からそのメカニズムを解明し、新たなマゾヒズム概念を定式化することで、マゾヒズムの実践が、いかに現在の社会構造に働きかけうるか、その可能性を追求することにある。そして、現在の私たちの思考を支配している二元論的な認識形式を脱中心化することを目指し、ジェンダー理論における主体概念の考察にさらなる展開をうながす。

女性のマゾヒズムは、家父長的な権力関係が反映されたものであり、擁護することはできないとする批判に対し、本論文では、女性の性的自由の一つとしてマゾヒズムを位置づけつつ、女性の積極的で自発的なマゾヒズムの実践が、現状の権力構造を脱中心化する可能性を持つという観点からマゾヒズムを評価し、そのメカニズムについて分析し、理解可能性を上げることが試みた。

しかしながら、女性とマゾヒズムの関わりを検討しようとするならば、このようなマゾヒズム一般の性格付けに関わる問題にとどまらず、よりいっそう根本的な問いを立てる必要があるように思われる。すなわち、そもそもこれまで、「女性のマゾヒズム」なるものが存在したと言えるのだろうか、という問いである。

マゾヒズムについて議論することは、ジェンダー構造における権力関係について議論することである。なぜなら、サドマゾヒズムは権力関係を利用することによって性的快を得るからである。これまでのジェンダー構造によって、マゾヒズムは女性の本性とされてきたため、女性の性的なマゾヒズムは、男性のそれとは異なり、本性であるとか、日常の権力構造を単純に反映したものと考えられてきた。そのため、女性の性的なマゾヒズムは、常に日常における権力構造との関連で議論されてきたのである。

しかし、サドマゾヒズムが権力関係を利用したロールプレイでありパフォーマンス実践であると考えると、サドマゾヒズムは、女性が自発的に選択した、「権力関係のパロディ」であると定義することもできよう。

そうすると、新たに、女性にとって女の本性ではない、自発的に行われる性的なマゾヒズムの可能性について、議論する必要がある。

そこで、これらを論じる方法として、本論ではまず、マゾヒズムをめぐる諸問題の論点を整理する意味も含め、第1章では、女性の性的な主体性という概念とセクシュアリティの複雑性を提示することで、本論でマゾヒズムを主題として取り上げる意義について明らかにしておく。

次に、第2章で、ジークムント・フロイトやフロイト派によって作り上げられた女性の本性としてのマゾヒズムの定義と、フロイトに対して最初に体系的な批判を行ったカレン・ホーナインのマゾヒズムについての議論を取り上げ、考察した。ここでは、マゾヒズムをどのように定義づけるのか、その上でどのように女性と関連づけるのか、ということについての本論での立場を明らかにしている。

そして第3章では、女性のマゾヒズムを取り巻く諸問題の論点を整理する意味も含め、レズビアン・サドマゾヒズムが発端となって起こったアメリカでのSM論争を概観する。この論争においては、先に触れた、女性とマゾヒズムとの関わりをめぐる二つの見方の対立が際立って現れ、サドマゾヒズムを日常の権力の反映と見るか、日常の権力のとらえ返しとしてのパフォーマンスと見るかが、大きな争点となった。

続いて第4章では、前章までの議論を踏まえ、マゾヒズムを肯定的に評価することを試み、肯定的に評価できるのであれば、それはどのような観点からなのかについて考察した。そのために、パット・カリフィアらによる戦略としてのサド

論文内容の要旨

氏名 日合 あかね

専攻 人間文化科学専攻

指導教員氏名 宗像 恵

論文題目

マゾヒズムの機能分析とその可能性

——女性の性的主体性の（再）構築に向けて——

論文要旨

本論文の目的は、女性の性的自立の可能性を模索することにあるが、そのために、女性の自立とは相容れないと考えられてきたマゾヒズムの概念を主題とする。なぜなら、マゾヒズムが受動性や従属性、あるいはそれと同等の意味を与えられてきたと考えられるからであり、性的主体としての女性の可能性を考察する際、マゾヒズムの問題を回避することはできないと考えるからである。

本論文では、従来のマゾヒズム概念の再検討からそのメカニズムを解明し、新たなマゾヒズム概念を定式化することで、マゾヒズムの実践が、いかに現在の社会構造に働きかけうるか、その可能性を追求することにある。そして、現在の私たちの思考を支配している二元論的な認識形式を脱中心化することを目指し、ジェンダー理論における主体概念の考察にさらなる展開をうながす。

女性のマゾヒズムは、家父長的な権力関係が反映されたものであり、擁護することはできないとする批判に対し、本論文では、女性の性的自由の一つとしてマゾヒズムを位置づけつつ、女性の積極的で自発的なマゾヒズムの実践が、現状の権力構造を脱中心化する可能性を持つという観点からマゾヒズムを評価し、そのメカニズムについて分析し、理解可能性を拓けることを試みた。

しかしながら、女性とマゾヒズムの関わりを検討しようとするならば、このようなマゾヒズム一般の性格付けに関わる問題にとどまらず、よりいっそう根本的な問いを立てる必要があるように思われる。すなわち、そもそもこれまで、「女性のマゾヒズム」なるものが存在したと言えるのだろうか、という問いである。

マゾヒズムについて議論することは、ジェンダー構造における権力関係について議論することである。なぜなら、サドマゾヒズムは権力関係を利用することによって性的快を得るからである。これまでのジェンダー構造によって、マゾヒズムは女性の本性とされてきたため、女性の性的なマゾヒズムは、男性のそれとは異なり、本性であるとか、日常の権力構造を単純に反映したものと考えられてきた。そのため、女性の性的なマゾヒズムは、常に日常における権力構造との関連で議論されてきたのである。

しかし、サドマゾヒズムが権力関係を利用したロールプレイでありパフォーマンスな実践であると考えれば、サドマゾヒズムは、女性が自発的に選択した、「権力関係のパロディ」であると定義することもできよう。

そうすると、新たに、女性にとって女の本性ではない、自発的に行われる性的なマゾヒズムの可能性について、議論する必要がある。

そこで、これらを論じる方法として、本論ではまず、マゾヒズムをめぐる諸問題の論点を整理する意味も含め、第1章では、女性の性的な主体性という概念とセクシュアリティの複雑性を提示することで、本論でマゾヒズムを主題として取り上げる意義について明らかにしておく。

次に、第2章で、ジークムント・フロイトやフロイト派によって作り上げられた女性の本性としてのマゾヒズムの定義と、フロイトに対して最初に体系的な批判を行ったカレン・ホーナインのマゾヒズムについての議論を取り上げ、考察した。ここでは、マゾヒズムをどのように定義づけるのか、その上でどのように女性と関連づけるのか、ということについての本論での立場を明らかにしている。

そして第3章では、女性のマゾヒズムを取り巻く諸問題の論点を整理する意味も含め、レズビアン・サドマゾヒズムが発端となって起こったアメリカでのSM論争を概観する。この論争においては、先に触れた、女性とマゾヒズムとの関わりをめぐる二つの見方の対立が際立って現れ、サドマゾヒズムを日常の権力の反映と見るか、日常の権力のとらえ返しとしてのパフォーマンスと見るかが、大きな争点となった。

続いて第4章では、前章までの議論を踏まえ、マゾヒズムを肯定的に評価することを試み、肯定的に評価できるのであれば、それはどのような観点からなのかについて考察した。そのために、パット・カリフィアらによる戦略としてのサド

論文審査の結果の要旨

氏名	日合 あかね		
論文題目	マゾヒズムの機能分析とその可能性 ——女性の性的主体性の(再)構築に向けて——		
判定	合格・不合格		
審査委員	区分	職名	氏名
	主査	教授	宗像 恵
	副査	教授	朴木 佳緒留
	副査	教授	三上 剛史
	副査	教授	坂本 千代
	副査	准教授	金野 美奈子
要 旨			
<p>本論文は、現代社会における女性の性的主体性の確立に関わる諸問題を、従来は性的主体性とは対立的に考えられてきた、性的マゾヒズムという性現象を手がかりにして再検討し、女性の性的自立に対して新しい展望を与えることを目的としている。</p> <p>論じられるべき主な論題は、以下の4点にまとめることができる。(1)従来のマゾヒズム理解の改訂に関して、争点となる性的マゾヒズムと社会のジェンダー構造との関係や、マゾヒストの主体性の分析が必要となる。(2)近代的主体概念に対する批判的考察をめぐって、近代的主体の代替となる行為体や間主観性の概念の検討が必要となる。(3)女性性の形成理論の見直しに関して、フロイト理論に代わるべき理論が求められる。(4)女性の性的主体性の再構築に関わるマゾヒズムの寄与をめぐって、性的マゾヒズムの実践における主従関係の再解釈が課題となる。</p> <p>本論文は、フロイト以来のマゾヒズムをめぐる理論の変遷を通覧する一方で、フェミニスト的立場からのセクシュアリティをめぐる議論を検討することを通して、上記の諸問題に対して明確な見通しを与え、それによって、現代社会における女性の性的自立に寄与しようとするものである。</p> <p>本論文の構成と概要は以下の通りである。</p> <p>第1章では、ラディカル・フェミニストの主張に応じつつ女性の性的主体性を考察する上で、</p>			

女性の自発的な性的マゾヒズムを検討することの意義が論じられる。女性のセクシュアリティをめぐっては、受動性と能動性、従属性と主体性が絡み合った、複雑な問題構制が成立することが指摘される。

第2章では、マゾヒズムを女性の自然本性とした初期フロイト派の議論と、ついにマゾヒズムの性格の形成に関わる社会・文化的要因を強調したカレン・ホーナの議論が顧みられる。ホーナの議論には、ジェンダー本質主義に陥る嫌いはあるが、マゾヒズムを対人的コミュニケーションの一形式と捉える重要な視点があることが指摘される。

第3章では、アメリカのフェミニストの間で交わされたSM論争を概観する。この論争では、公私の二領域の関わりをめぐって、性的マゾヒズムと社会のジェンダー構造の関係が争点となったが、SM擁護派のパット・カリフィアらの議論に採るべき論点があることが指摘される。

第4章では、近代的主体概念とマゾヒズムとの関わりが検討される。マゾヒストの主体性をめぐって、マゾヒズムを近代的主体の形成過程の反転として捉えるジョン・ノイズの議論や、近代的主体に代わりうる行為体の概念を提示するジュディス・バトラの議論が参照され、マゾヒズムの契約には間主観的関係の生成の契機が見出されることが指摘される。

第5章では、ケアの倫理を提唱したキャロル・ギリガンの議論における自己犠牲の位置づけの考察から、他者との関係性の中での自己の欲望の承認の重要性が指摘される。それとともに、女性性の形成と女性の欲望の欠如に関わる、フロイト理論を改訂した、サラ・コフマンやジェシカ・ベンジャミンの議論が検討される。とくにヘーゲルの欲望論、主と僕の弁証法を参照したベンジャミンの議論からは、間主観的関係性構築の重要性とともに、マゾヒズムのうちに間主観的関係性構築の契機および自己の欲望の承認を求める女性の願望を見出す可能性への示唆が、汲み取られる。

最後に第6章では、女性の性的主体性の再構築に寄与しうる、マゾヒズムの積極的側面がまとめ論じられる。性的マゾヒズムにおける主従関係に新解釈を与えたジル・ドゥルーズの議論が参照され、またマゾヒストの表象についてのドゥルーズとベンジャミンの議論から、マゾヒズムによる主体の解体と新たな創造の可能性が指摘される。これにしたがって、マゾヒズムには、主体の消滅と再創造のエロスの表現という意味づけが与えられる。

本論文は、女性の性的主体性の確立とマゾヒズムの関わりについて、関連する文献を渉猟したうえで、論点を抽出し整理することによって、女性の性的自立に対して展望を与えようとするものである。文献中心の研究という方法的制約もあって、問題にされているマゾヒズムのリアリティについて疑義が生じるところがあり、また概念規定や議論の精密さが必ずしも十分ではないところがある。しかし、日本において女性の性的主体性の確立とマゾヒズムの関わりについて、包括的に論じる研究はこれまで見られず、その試みという点において本論文はユニークであり、女性の性的主体性の確立とマゾヒズムの関わりについて一定の見通しを与えたことは、学術的に評価されるべきものと認められる。したがって、学位申請者の日合あかねは博士(学術)学位を得る資格があるものと判定する。

なお、提出された参考論文は以下の通りである。両方とも審査を経て掲載されたものであり、二番目の論文は査読付きの学会誌掲載論文であって、博士論文の提出資格要件を満たしている。

(1) 『女性のマゾヒズム』再考：アメリカにおけるSM論争を中心に、『女性学年報』第26号、2005年、日本女性学研究会、pp.41-59。

(2) 「女性の性的自立におけるマゾヒズム的行為体の可能性」、『フォーラム現代社会学』第4号、2005年、関西社会学会、pp.96-107。